

マヤ文明のチチェン・イツァ

近藤 節夫

メキシコのユカタン半島の森の中には、いくつかのマヤ文明の神秘的な遺跡が残されている。その中で最もミステリアスで天文学的な興味をそそるのが、このチチェン・イツァのカスティージョ(スペイン語で城砦の意)である。

この石積みのピラミッドは、その壮大な形状にも圧倒されるが、何と言っても摩訶不思議で興味を惹くのは、91段の正面階段の西側の手すりに彫刻された、マヤの最高神ククルカン(蛇)が「春分の日」と「秋分の日」の日没時間になると真西から照らされる太陽光線によって、蛇の胴体だけがその影絵となって浮かび上がることである。地元の人ならいざ知らず、その一刻を狙ってその一瞬を見ることのできる外国人観光客は、よほどの粘り強い根気と幸運に恵まれなければ難しい。

「羽毛のある蛇の姿をした神・マヤの最高神ククルカン」が、太陽が沈むにつれてこの最上段の神殿から地上に降ってくる神々しい姿にははっと息を呑む。残念ながらこの瞬間に立ち会うことはできなかったが、ビル8階に該当する高さからククルカンが舞い降りる神秘的なシーンをテレビで観た時言い知れぬショックを受けた。9～13世紀の昔天文学から緻密に計算されたカラクリによって、幻想的な神の出現を現代に演出した当時の天文学者の知恵にはただ感嘆するばかりである。

このピラミッドは55m四方の基底の上に、高さ24mで91段の階段を各四方に配置して全部で364段になっており、最上段には真四角の神殿が乗っかり、この一段を加えて365段の階段となっている。一年を365日とした「暦のピラミッド」の由来である。

さらに驚くのは、近くのジャングルの中にマヤ人が作った天文台が崩れかかって残されている。この天文台で長い時間をかけて、マヤ人たちは天文を研究し農耕や戦争に役立たせていた。因みにこの当時使用したマヤ暦は、1年を365.2420日だったというから、現代のカレンダーの365.2422日とはごく僅かの誤差しかない。天体鏡のない時代に、マヤ人はこんな密林の中で空を見上げながら、何を思い泉のように未来永劫の普遍の知恵を産み出したのだろうか。